

本学の日本語教育における私の課題

日本語教育部

中川健司

本学の日本語コースの特徴としては、同じ授業を多様な学習者が履修しているということが挙げられます。学生の出身国も多様で、2013年度に私が教えた学生の国籍を数えてみると、実に 28 か国にもなります。また、本学での身分も様々で、秋学期に担当していた「J100 集中」という初級の授業では、学部留学生、大学院生、予備教育生、交換留学生、研究生、客員研究員と、非常に多様な学習者が同じ教室で日本語を勉強していました。このような多様な背景の学生がともに学ぶのは、授業の中で様々な価値観や文化に触れたり、自分と異なる意見に耳を傾けたりする機会を得るという意味で学習者にとっても非常に有益だと考えられますし、私も日々新たな発見があります。しかし、このような学習者の背景の違いは、時として、学ぶ目的や学び方の違いにもつながり、それにより一つの授業として運営することが難しくなることもあります。この多様性から得られるメリットを享受しつつ、一つの授業として成立させるということのバランスをどうとるかというのは、常に教師にとっての課題だと言えるでしょう。

私の専門分野は専門日本語教育で、日本語を使って特定の専門分野を学ぶ学習者をどう支援するかというものです。現在は主に EPA（経済連携協定）に基づいて、日本で介護福祉士になるために来日したインドネシア人、フィリピン人の候補者のための専門用語の教材を作成しています。この専門日本語教育という分野の大きな柱の一つが、学部、大学院で専門分野を学ぶ学習者の支援です。現在のところ、本学では、アカデミック・ジャパニーズやアカデミック・ライティングのような科目もありますが、特定の分野に特化した専門日本語教育はそれほど行われているわけではありません。これは、日本語の授業を履修する学習者の専門分野が多岐に渡っており、一つの授業の中で特定の分野の語彙は表現を扱うというのが困難なためです。将来的には、本学でも、これまでの経験を生かした専門日本語教育の実践を行えればと考えています。